



TITLE:

ブルジョア経済學の俗流化と民族の問題 - カール・クニースに於ける民族の問題の序論

AUTHOR(S):

出口, 勇藏

CITATION:

出口, 勇藏. ブルジョア経済學の俗流化と民族の問題 - カール・クニースに於ける民族の問題の序論. 經濟論叢 1953, 71(2): 116-125

ISSUE DATE:

1953-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/132290>

RIGHT:

經濟論叢

第七十一卷 第二號

ブルジョア經濟學の俗流化と民族問題

…………… 出口 勇 藏 (1)

實業同志會の向背 …………… 市 原 亮 平 (11)

庄屋リコールの問題 …………… 編 堀 江 英 一 (31)

は し が き …………… 堀 江 英 一

徳川時代における山城國の農民闘争 …………… 大 槻 弘

備中倉敷における新祿古祿の抗争 …………… 内 藤 正 中

ドイツ鐵鋼業の管理形態 …………… 中 村 忠 一 (49)

[昭和二十八年二月]

京都大學經濟學會

ブルジョア經濟學の俗流化と民族の問題

——カール・クニースに於ける民族の問題の序論

出口 勇 藏

ブルジョア經濟學と民族とは、この科學の成立の由來からみても、その後の歴史的展開についてみても、またその没落の道をたどろうとするにさいして受ける批判の内容から見ても、たいそう深いつながりをもっている。ブルジョア經濟學がブルジョア社會の成立と發展と没落とに直接つながっていることは、知れわたつた眞理であるが、そのブルジョア社會そのものが、民族的な基盤と深く結びついていることが、ふかく省みられなくてはならない。そしてたとえばアメリカ合衆國においてみられるように、一見すると、諸民族のメルティング・ポットであつて、ある特定の民族には無關係に近代市民社會が發展したようにみえるところにおいても、實はその發展過程そのものがヨーロッパの「歴史的背景」なしにはありえなかつたのであつて、メルティング・ポットの比喩は、それを内容について分析すると、必ずしも當を得たものではなく、アメリカのブルジョア社會の階級分化の上に、「歴史的背景」における民族の問題は大きな役割をはたしてきたし、またはたしつゝあることを考へなくてはならない。それのみかアメリカにおいては、旧大陸では大きな問題とはならず、ヨーロッパの資本主義國のアフリカやアジアにおける、植民地においてひきおこされたところの、人種問題が、特殊に大きな規模と深刻さにおいて、わだかまつて

いることがわかるであらう。ブルジョア經濟學の對象は、ノルマルな場合には、つねに民族的基盤の上に立つところの市民社會であるのであつて、もし民族的な基盤から無關係に市民社會が成立しているとすれば、その市民社會はそれと關係をもつ、他の一つのまたは二つ以上の民族社會に固有に事情からして、その由來が説明されることによつてはじめて、十分な説明が期待されるはずのものである。したがつて、經濟學の理論について歴史性ということが主張されることが當然だとするならば、それと同様の意味に於て、空間性ということが、民族性というかたちで、注意されてよいと考えられるのである。たとえば古典學派についていうならば、この經濟學の科學的達成としての歴史的榮譽をになう學派の思想のうちには、イギリスの民族社會に固有なものであつて、他の民族社會の近代的發展にもまた存在しはするけれども、その著しい特色においては、イギリスにおいてほどの重要な意義をもつていない、といわざるを得ないような要素を、指摘することは困難ではない。その一つの例として功利主義思想をとつてみよう。功利主義思想は古典學派の前提の一つであるけれども、その思想の徹底的な普及と浸潤は、イギリス以外の他の民族社會にはみえることをえないものである。ヨーロッパ社會に限つてみても、ドイツの社會には、イギリスほどに徹底した功利主義思想が生きて動いておらず、したがつて古典學派の理論的命題は、イギリスにおいてのように、いきいきとした妥當性をもつて現われないのである。こういえば、それは歴史的發展段階の相違からくる現象であつて、その思想の成熟と普及、そしてそれ以前の思想の止揚のために、時間が充分に與えられるならば、ドイツにおいてもイギリスにおけると同じ程度に現實的に、古典學派の命題はあてはまるはずである、という反對論が期待せられる。たしかに、一面では時間的な發展段階の相違が、二つの民族社會における經濟學の命題の妥當の程度の差をもたらしてはいるのであるけれども、しかしそれだけではなくして、民族社會——これが非歴史的に固

定した性格をもっているなどと考えるのではない、歴史的に變化しゆくものでありながら、その變化の都度にくりかえし現われようとするものである——に固有な原理が經濟學の構造そのものの中に入りこんでいる事を、主張したいと思うのである。古典學派という慣用語にしながらが、その意味を深く考えようすると、複雑な疑問がまわりついてくるのではないか。少くとも、古典學派をば概念や命題や法則などでかためられ、固定した、死んだ体系とは考えず、現實の中で生きて動いており、現實の秩序づけと發展とにたえず役立っていたし、また現在でもそれに固有の條件がそろうところでは、その役割りを果たすだけの力をもつたものと、解する限りは、古典學派における歴史性とともに、民族性の契機をもあわせ考えなくてはならないであらう。

民族性の契機は、いつも經濟學者によつて自覺されているとは限らない。大ざっぱにいうと、經濟生活の主体が社會的自由を享受しているところでは、餘り深く注意されないで、逆に經濟生活の主体が社會的自由をうばわれているところでは、民族性の自覺が高まつてくるといえるだろう。たとえば重商主義時代のイギリスの經濟思想の文献目錄を一覽するひとは、表題にイギリスとかわが國とかの文字があまりにも多く冠せられていることに、驚かなくてはなるまい。その時代は進歩的な立場に立つものも、反動的な立場にたつものも、民族的要求をば表面にかけることによつて、主觀的にも、客觀的にも、學問的情熱をかき立てることができたのであつた。アダム・スミスの思想の展開についてみても、その理論の背後には、たえずイギリスの當時の社會を、他の國々や他の時代と比較對照させる考慮が拂われており、イギリス人の享受しまた享受すべき、經濟活動の自由の要求が、一般的な形において、行われていることは、詳しく論ずるまでもないだろう。マルサスやリカードやチエームス・ミルについても、理論の背後にかくされている民族的要求の契機を指摘することはむづかしいことではない。

けれども、古典學派が俗流化のみちをたどりはじめると、ブルジョア社會の現實の動きは經濟學の展開の上に生き生きと反映されなくなりはじめた。逆にいうと、經濟學の理論的展開がブルジョア社會の實相を、その具體的なすがたにおいて、あとずけるということが、なくなりだしたのである。ブルジョア社會の統一は固有の形での階級分化、したがって固有の形での階級闘争の場として存在するけれども、階級闘争はげしくなると、その統一の場もまた安定度を失なつていつた。秩序や安定性を失つた、はげしい階級闘争の場としての、ブルジョア社會の本質を、そのまゝに反映し、そしてその内から秩序と安定とにむかう方向を見いだそうとするものが、科學の名に値する經濟學であるべきであるのに、俗流經濟學はいろいろの前提を立て、粉飾をほどこして、その本質そのものの吟味はおこなおうとはせず、そしてそのことによつて、解くべき多くの問題を回避しつゝ、無秩序の本質を秩序あるものゝごとくに、不安定の本質を安定度に恵まれたものゝ如く、はげしくなりまざる階級闘争をば一時的で、やがては融和にむかう不調和であるかのごとく、説くことに努力したのである。そして、民族性をめぐる問題もまたこのようにして回避された問題のひとつであつた。

二

いま俗流經濟學における民族性に關する問題の回避を例證するために、ジョン・ステュアート・ミルについて簡単に論じることしよう。

ミルは「エソロジ」または「性格形成學」という理論が社會科學の基礎理論であるといふ、「政治的エソロジ」がその最も重要な理論であると主張して、その理論の上に社會科學を築き上げようとした。しかも「民族性」

national character に關する、この「政治的エソロジー」という理論をば、彼がついに展開することを得ずして止んだことは、周知の事實である。個々の社會科學の對象界に活動する人間の、その對象界に固有な特殊な行爲の様式——たとえば經濟行爲——そのもののなかに、民族性（あるいは廣く抽象的な形でいえば共同体的性格）の表現といわるべきものを探究することをしないで、そのような特殊な行爲の様式の内容からは離れて、人間の民族性一般をばいきなり問題にすることができるものかどうか、またできるとしても、どの程度の妥當性を特殊な社會的行爲について、要求し得るのか、ということは、きわめて困難な問題であつて、その解決を與えることなくして、ミルが「エソロジー」という理論を構想したことに、われわれは第一の批判の目をそそがなくてはならない。ミルに於ては政治的エソロジーは内容的に展開されなかつたのであるから、彼の方法論は實質的に破綻していたといわなければならないのであるが、その理由の一つは、上の疑問を追求することから得られるであらう。しかしながらわたくしはいまそれに立ちいつて論じようとするものではない。こゝでとり上げたいのは次の点である。——ミルは、經濟學の（というよりブルジョア的な科學といいかえた方がよいだらう）方法論的位置づけのために、「政治的エソロジー」の内容の展開を待たずとも、痛痒を感じたわけではなかつた。それは、ミルの歴史意識が、以前に若干の分析を加えたように、「民族性」の相違というものは時代の経過とともにだんだんに消えゆくものであるという思想を含んでおり、したがつて、イギリスやアメリカの先進ブルジョア社會をば研究對象とする經濟學は、「抽象的なしは假定的な」理論としては、正しさを失なうものではないと、彼は考えていたからである。しかしながら、この点についてもわれわれは更に追究する、もしミルの歴史意識が民族性の問題をばアイマイのうちに消してしまふようなものであるならば、その歴史意識は時間の経過に目をうばわれて、空間性の問題をかえりみないところの、抽

象的な歴史意識にすぎないではないか、と。

(1) ミルの方法論にの問題については、拙著『經濟學と歴史意識』の第三論文をみられたい。

われわれの批判の第二の点は次のごとくである。ミルにおいては、上記のエソロジーを媒介の項として、社會科學は二つの群に分かたれる。すなわち、一般社會學と特殊社會學的研究とがそれである。たとえば經濟生活に關する科學は、「社會狀態」を一般的に論ずる一般社會學の理論を前提して、「社會狀態」においてあらわれる特殊な問題が研究されるという構想が、行なわれるのである。とすれば、この点からみても、經濟生活における民族の問題は、さきの政治的エソロジーをめぐる批判点とはともかくとしても、經濟學そのものには無關係なものであつて、一般社會學の問題領域の中に押しこめられる結果にならざるをえない。(經濟學の方法論において經濟學と一般社會學とに問題を分屬させることは、ミル以後のブルジョア經濟學の形態の著しい一つのならわしである。そしてミルにおいては、この

分屬と、經濟理論内部における生産と分配との機械的分離とは内面的に結びついていると思われる。しかしこの点にはいまは立入らない。) このようにミルにおいては、經濟學において民族が積極的な問題領域の中にはいることなしに終つたのである。これをわれわれの批判の一つの目標にかかげてあやまりないであらう。

私はさきに民族が經濟學において問題とせられるのは、社會的自由が問題とせられる時においてである、と語つた。しかば、ミルにおいて俗流化した經濟學に關しては、社會的自由は問題になつていなかつたというのか、との疑問が提出されるであらう。そして、ミルの有名な、しかりあまりにも有名な、『自由論』が、たどころに反對論者の腦裡に描かれることであらう。まことにそうである。ミルの經濟學は彼の自由論と密接に結びついているし、また彼の『經濟學原理』の第五篇の終りには、「自由放任政策」の根據とその限界に關する詳細な理論があつ

て、それに『原理』全体の結論という重要な地位が與へられてゐると、考えなくてはならないのである。また「精神的奴隸制」を排斥し「個人はめいめいが自分自身の利益を一番よく判斷するものだ」という原則」のために戦つたミルについて、自由についての反省が乏しいなど、いうのは、沙汰の限りであるともいわれよう。

(1) Cf. J. S. Mill, *Principles of Political Economy*, Book V, Chapter XI.

けれども、あたかもそこに問題が根づく伏在してゐるのではないだらうか。なるほどミルの經濟學は個人の社會的自由の要求と家父長的な政治權力の排斥という實踐的原理と結びついており、その限りでは古典學派が進歩的意義をもちえた時代の、その學派の社會的な意義を、等しくわけ合うかのようにみえる。けれども近代資本主義國の國內における階級分化とその相互の關係についての、リカードにおいて成熟した古典學派的な感覺を、ミルが失なかつたならば、そして東印度會社の事業内容についての、彼みづからの日々の見聞をば、世界人的な立場で反省することを怠らなかつたならば、彼は彼のいう「自由」が植民地人民の擄取によつて共同の特權を享受してゐる、イギリス・ブルジョアジーの惠まれた、排他的な自由であるにほかならず、イギリスのプロレタリアートについても、またいつそう高い程度においては、植民地人民については、妥當性をもちえないところの自由であることを、知らねばならぬ筈であつた。自由のブルジョアジー的な偏向は、自由をして、プロレタリアートに對して、またいつそう高い程度において他の民族に對して、みづからを否定し、隸屬を要求するものに轉化させているのである。これまで、ブルジョア的自由がプロレタリアートに對しては自母とはならずむしろ束縛にほかならぬことが批判的に認識されてゐたけれども、いまやわれわれは、それとあわせて、ブルジョア的自由が植民地擄取を合理化するものでしかないものになることをも明瞭に認識しておかなくてはならない。〔註〕要するにブルジョア經濟學を

俗流化したミルにおいては、民族性の問題が正しく把握されておらず、このことは彼の方法論において、また彼の自由論にかかわらせて、はつきりと斷言することができるのである。

〔註〕わが國のインテリゲンチヤにとつて、ミルの『自由論』ほどになじまれてきた書物はないだろう。明治のはじめの翻譯から、現代もまだ英語の學習用のテキストとして用いられているものに至るまで、どれだけ多くの青年が、この書物から社會的自由のブルジョア的なあり方を習得したことであろう。しかしながら、そのなじまれ方に比例して、この書物は日本人の社會的自由の獲得のために貢獻してきたであらうか。この疑問に對しては、むしろ否定的な答をしなくてはなるまい。ミルの『自由論』はわが國における社會的自由の伸長に貢獻したどころか、むしろ逆に、その抑壓に貢獻したといわなくてはならぬであらう。そしてその理由は、後進國や植民地類似の國の人民の社會的自由とは、ミルが説くような自由とはげしく異なり、とによつてしか、獲得することができないことにある。

「他の民族を抑壓する民族は自由ではありえない」。——これはエンゲルスの古典的な命題であるが、この命題の示すところによれば、ミルの自由論は本來の自由論ではありえないし、従つて、經濟學において民族性を問題としうる立場に、彼はそもそも立ちえなかつたのであるといわなければならない。

三

民族性の問題が、資本主義という社會的發展段階において、どんな形であらわれるかを、ここでたしかめておこう。レーニンは『民族問題にかんする批判的覺書』（一九二三）においてかいてゐる。

「發展途上にある資本主義は、民族問題における二つの歴史的傾向を知つてゐる。第一の傾向は、民族生活および民族運動の覺醒であり、一切の民族的壓制に對する闘争であり、民族國家の創造である。第二の傾向は、民族間のあらゆる交渉の發達と頻繁化であり、民族的隔壁の破壊であり、資本・經濟生活一般・政治・科學等々の

國際的統一の創造である。

この二つの傾向は、資本主義の世界的法則である。第一の傾向は、資本主義の發展の初期に支配し、第二の傾向は、成熟した、そして社會主義社會へ轉化しつつある資本主義を性格づけるものである……」⁹⁾

民族に關する資本主義時代の世界的法則の内、その第一のものは、資本主義のレイ明期における民族國家の創造の時代、したがつて重商主義時代にみられる民族問題の問題を指すものと考へられるが、それとともにまた、スターリンが解しているように、帝國主義時代における被抑壓民族の自由と獨立とを要求する傾向と解することもできる。³⁾ またその第二のものについても、ヨーロッパ的な世界内部の國際的統一の創造を指すともいえるし、また植民地その他の未開發地域をふくめた、世界的な規模での國際的統一の創造を指すとも誤りではない。このように時間的な發展の段階に則して考えた場合に、スターリンがいうように、民族問題に二つの歴史的段階を區劃することができ、さらに、第二次大戰が終熄ののちから今日までの時代をそえるならば、三つの段階として考えることができるであらう。

スターリンはレーニンが指摘する二つの傾向は、帝國主義においては融和できない矛盾であるという。⁴⁾ 帝國主義時代には判然とするものの、資本主義の初期の時代から、その矛盾の萌芽は藏されていたのである。それだから、先きにミルについてみたように、俗流經濟學においては民族性の問題をばその問題領域のうちに取入れることができなくなつて、問題の所在とはゴマかざるをえなかつたのである。

經濟學史上、民族と經濟學との關係をば強調したものは、いうまでもなくドイツの歴史學派である。この學派が俗流經濟學のドイツ型であることは、以前から看破されたところであつて、改めて論ずる必要をみない。けれども

先きにみたミルの俗流化における民族性の喪失と比べてみると、著しい相違がみられる。ミルとはちがつて、ドイツ歴史學派には、民族性をば何とかして、ブルジョア經濟學の理論の内にもぐりこませようと、懸命に努力しているからである。わたくしは、これから、その努力がどんな風に試みられたか、そしてその試みはいかに失敗し、客觀的には民族を強調することによつて、いかにブルジョア的僞斷がドイツ風に行われたかを確かめておこうと思う。そしてドイツ歴史學派のうちで最も理論的に精妙な業績をのこしたカール・クニースを特に追究の對象にとり上げるであらう。

- (1) レーニン著、村井繁譯『民族と植民地問題』（双文社）一三一、一三二頁。
- (2) スターリン『レーニン主義の基礎について』スターリン全集第六卷一五九頁。
- (3) 同右、一五二、一五三頁。
- (4) 同右、一六〇頁。

（本稿は「カール・クニースにおける民族の問題」の序論にあたる。健康上の理由で本身はこの部分のみをかうげることを読者に謝す。）